

(別添1)

国立がん研究センター東病院及び地域薬局において実施している
抗がん剤の安全使用の取組みに関する調査

1. 施設概要

国立がん研究センター東病院には、診療科数は33科、病床数は425床であり、薬剤部では現在47名の薬剤師が活躍している。当院は柏市を中心とする東葛北部地区と、千葉県全域及び近接する東京・埼玉・茨城を主体として全国に及んでおり、がん診療連携拠点病院としてがん医療を専門的に行っている。がんの特性上、50歳代から患者が増加傾向にあり、特に60歳以上、70歳以上の患者が多く来院され、全体の約7割を占めている。2014年からはサポータティブケアセンターとして多職種チームを統合し、初診時から切れ目のない患者さんへの支援が提供できる体制を構築している。

2. 国立がん研究センター東病院において実施している抗がん剤の安全使用の取組みと課題

国立がん研究センター東病院薬剤部では、約130人/日程度の患者が通院治療のために来院している。

自宅で副作用が起こった場合においては、患者がホットラインに電話(約220件/月、朝に多く、時間帯によっては1件/分程度の頻度でかかってくる)できる体制を取っている。日中は常勤薬剤師、夜間は担当医師が電話の対応をし、24時間体制で患者からの副作用報告に対応する。ただし、下痢などの軽度な症状の場合、薬局にける患者も多い。電話対応を担当する薬剤師はトリアージ能力をつけていないと厳しい面も多い。服薬に関する事柄以外にもその人の生活背景も含めて把握した上での対応が求められる。

最近では、新たな経口抗がん剤の開発により経口薬での治療を受ける患者さんが増えており、主作用も副作用も注射薬による治療と同等である薬剤も多く、円滑に治療を進めるためには副作用の管理がとても重要となっている。また、服薬アドヒアランスが向上しなければ薬剤の治療効果を得る事はできないといえる。がん東病院での経口抗がん剤治療は外来治療が中心であり、患者さんは在宅でがん治療を受けているケースが多い。この事からも当院では安全性を高めるための対策を推進しており、その一環として、薬剤師外来を平成21年6月より開設した。薬剤師外来の役割は、外来で経口抗がん剤治療が開始される患者に対して服薬指導を行い、次回以降の受診時からは医師の診察の前に薬剤師による問診を行い、問診情報を医師へ還元すると共に副作用に対する薬物治療の提案等も行っている。例えば、患者は治療後に現れた症状を副作用と認識していないことが多く、問診などで初めて判明するケースもあるため、薬剤師は具体的な例を用い患者の副作用と考えられる事象を引き出し、その副作用に応じた薬剤の変更をすることとしている。なお、がん東病院の薬剤部のような対応を全ての病院で実施できているわけではないので、

例えば、初めての抗がん剤を院外処方せんで地域の薬局から受け取る場合には、その薬局において、薬物療法の説明や副作用の説明が重要になると考える。その際、患者の了解をとって、抗がん剤の副作用の種類と出現時期と出現期間を踏まえた電話確認することも、副作用の把握に有効な手段であると考えられる。

この他に、薬剤には在庫管理等を行うためにコードをつけるなどしてエラーを未然に防ぐ工夫も行っている。

3. 地域薬局において実施している抗がん剤の安全使用の取り組みと課題

患者の副作用状況を聞いた上で薬局では対処できないと判断した場合は、病院へ受診勧奨をするようにしている。

一方、課題としては次のような例が挙げられた。「担当医師と話しをしたいが忙しい」という理由で保険薬局薬剤師に相談をする患者や、「門前薬局以外の薬局に行ったら薬の取扱いがない」という理由で、処方箋をかかりつけ薬局に持って行ったとしても医薬品の在庫がなく門前薬局に戻られる患者もいるように聞く。また、どのような薬を服用しているのか知られたくない、つまり自らの疾患を特定されないためにお薬手帳を2冊持つ（たとえばがん疾患とその他の疾患で区別する）ケースも耳にしたこともある。この場合、薬剤の飲み合わせの確認が取りづらくなる等課題は多いといえる。

4. 薬薬連携

国立がん研究センター東病院では柏薬剤師会と、疾患、薬剤、症例検討等勉強会を実施している。門前薬局を含めた地域研修会は10年以上継続して行っている。これに加え、月1回、3年間（40回以上）にわたり近隣の薬局との勉強会も実施している。病院薬剤師と保険薬局薬剤師との連携を強化するという意味では勉強会のみではあるものの、保険薬局薬剤師は患者の自宅での様子を把握しているという観点からも、通院治療が主流となるがん患者に関する情報の共有は必須であるとしている。また、麻薬は怖いという先入観を払拭するためにまわりの病院や薬局が患者に対しフォローも行われている。国立がん研究センター東病院ではトレーシングレポートは使用していないとのこと。

5. 後発医薬品抗がん剤の使用状況と課題

課題とされている例として、後発医薬品のDI機能が弱いということ。医薬品そのものの安定供給に不確実性があることが挙げられる。に関して、後発メーカーが治験データを持たないとしても論文や学会報告から情報を集めるなどして情報収集を強化すべきであるし、後発メーカー側においては海外のデータベースを参考にしたり、副作用報告を集めたりすることでより添付文書の説明を充実させることが出来るはずであると考えられるとの意見が出た。に関して、後発メーカーとしては製造枠を超えることができないため、在庫切れのため供給が出来ないといった需要と供給のバランスが崩れている実態が

患者への治療薬の安定供給を阻んでいるとしている。医師との信頼関係により患者のほとんどは後発医薬品の服用を受け入れているのにも関わらずこのような事態を招いているため、どのようにしてがん患者に対し後発医薬品の抗がん剤を安定的に供給が課題とある。